

額田部狐塚古墳周濠部

発掘調査概要報告

1984. 3

大和郡山市教育委員会

序 文

近年、開発がますます大規模化の傾向をたどっていますが、開発に伴って実施される埋蔵文化財の発掘調査も増加の一途にあり、当大和郡山市としてもその対応に迫られているのが実状であります。

こうした状況の中で、昭和58年度から大和郡山市教育委員会が調査主体となり、埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その保護と活用に積極的に取り組むことになりました。本年度にすでに7件の発掘調査を実施し、多くの成果を収めております。

今回、その中で額田郡狐塚古墳周濠部の調査結果をとりまとめ「大和郡山市文化財調査概要1」として発刊することになりました。都市計画街路の建設に伴って実施した事前調査でありますが、関係各課や地元の方々のご理解とご協力を得て調査ができましたことに対し深く感謝の意を表します。

本書が多くの方々の目にふれ、埋蔵文化財に対する理解を深めていただくうえの一助になることを願うものであります。また、今後もおって調査体制を充実させていく予定であり、関係各位のより一層のご協力、ご指導をお願いする次第であります。

昭和59年3月

大和郡山市教育委員会

教育長 堀口喬三

例 言

1. 本書は、大和郡山市額田部南町字小山に所在する額田部狐塚古墳周濠部の発掘調査概要報告である。
2. 調査の契機は、都市建設部計画課が計画する都市計画街路・大和中央道の建設による。
3. 調査は、大和郡山市教育委員会技師・服部伊久男が担当し、昭和58年8月4日～8月11日にかけて実施した。調査のべ面積は約300m²である。
4. 現地調査・遺物整理には下記の方々の御教示、御協力を得た。記して感謝したい。
(敬称略)
奈良県立橿原考古学研究所（現地指導）
東組・中尾信一（現地作業員・遺物整理補助員）青木淳一（計画課）
5. 本書の執筆は、日次に記す通りであるが、「調査の契機」は原因者である計画課・新沢勲氏の執筆による。また、編集は服部が担当した。

本文

- I. 調査の契機と経過 (新沢 熊・服部伊久男)
II. 周辺の環境 (服部)
III. 調査の概要 (服部)
 1. 額田郡狐塚古墳の概要
 2. 調査方法
 3. 検出遺構
 4. 出土遺物
IV. まとめ (服部)

挿図

- 図 1. 現主要河川と調査地周辺の主要古墳
図 2. 調査地点
図 3. 調査区平面図
図 4. トレンチ東壁断面図
図 5. 山土埴輪実測図(1)
図 6. 出土埴輪実測図(2)
図 7. 出土埴輪実測図(3)

写 真

- 写真1. 作業風景
- 写真2. 周濠部全景
- 写真3. 外堤部の断面
- 写真4. “外周溝”の断面
- 写真5. 朝顔型埴輪

図 版

- 額田部狐塚古墳周濠部
- 図版1. 額田部狐塚古墳遠景
- 図版2. (a) 素掘溝検出状況
(b) 素掘溝検出状況
- 図版3. (a) 周濠部全景
(b) 周濠部全景
- 図版4. (a) 外堤部全景
(b) 外堤部全景
- 図版5. (a) 前方部前面部分の周濠
(b) 前方部前面部分の周濠土層堆積状況
- 図版6. (a) 周濠部土層堆積状況
(b) 周濠部分の黒色灰層の堆積状況
- 図版7. (a) 前方部南西隅部全景
(b) 前方部南西隅部全景
- 図版8. 出土埴輪

I. 調査の契機と経過

都市計画街路3・3・4大和中央道は、奈良県の中央を縦貫する幹線道路であり、北は京都府、南は和歌山県を結ぶ産業道路として計画決定された重要路線であるため、昭和49年度より都市計画街路事業の認可を得、街路築造事業を進めてきた。しかし、事業用地内（大和郡山市額田部南町小山）に、額田郡孤塚古墳があることが奈良県遺跡地図に記載されていることから、昭和56年に文化財保護法第57条2項の規定に従い埋蔵文化財発掘調査届を提出し、奈良県文化財保存課・市教育委員会・その他関係団体と協議を行ない、工事着手前に発掘調査を実施することになった。（新沢）

以上が調査の契機である。発掘調査は市教育委員会が担当することになり、日程・費用・方法等の具体的調整に入った。結果的に昭和58年8月4日から8日間を費して調査を実施し、以下の成果を収めることができた。また、調査後の措置として、残存墳丘部への堆土積上げの取り止め、必要個所の任意立会調査、周辺地域での採集遺物の届出等を開発行為実施課と申し合わせている。（服部）

II. 周辺の環境

額田部丘陵は、大和盆地の北西部、近鉄平端駅周辺から南西方向に展開する南北約500m、東西約2.5kmにわたる洪積丘陵で、丘陵据部での標高は約45m、頂部付近での標高約52mをはかる比高7.0mほどの低丘陵である。佐保川・寺川・初瀬川等の大和の大形河川の合流地点の北側に位置し、從来から丘陵上に古墳等の遺跡の存在が知られている。^{註①}

松山古墳は径約50m、高さ約5.0mの規模をもつ円墳で、幅約3.0mの周濠を備える。葺石、埴輪等の外部施設を伴わず時期未詳である。額田部孤塚古墳は、全長約50mの前方後円墳で、後円部に埋置された2つの木棺内から、鏡・玉・劍・刀・金銅製金具・馬具など豊富な副葬品が出土している。^{註②} 鎌倉山古墳は封土が流失し石室が露呈している後期の横穴式石室墳である。石室全長約6.0mを計り、花崗岩自然石の乱石積みにより石室を構築する。額田部丘陵の古墳群の終末を考える上で重要な古墳である。丘陵の西端部に2つの古墳群があり注目される。内、西町来迎・墓ノ間に所在する古墳群は、現状が墓地公園となり旧態は判然としないが、群内に全長約35mの前方後円墳1基を盟主墳として、径約10m前後の円墳で構成される後期古墳群であり、内一辺約15mの方墳1基を含む点、注目されよう。他方、現在、安堵村上窪田に位置する古墳群は、墓石の林立する墓地の中に若干その旧状を残すのみとなったが、径約15mの円墳5基で構成される古墳群である。これら2つの古墳群は、直線距離にしてわずか200mしか離れておらず、もともとは1つの古墳群^{註③}として認識できる可能性があろう。その他、西町の北東端に径約30mの円墳があり、また丘陵の中央部にも数基の古墳が存在するが、額田部丘陵全体を通じてみた古墳は量的にも少ない。ただ、大和盆地内の大形河川の合流地点に面する丘陵上に立地し、水運交通の要衝としての交通地理学的重



図1. 現主要河川と調査地周辺の主要古墳

- 1. 頼田部狐塚古墳 2. 松山古墳 3. 来迎墓ノ間古墳群 4. 上窪田古墳群
- 5. 島ノ山古墳 6. 寺ノ前古墳 7. 11-A-9 8. 高山古墳 9. 河合大塚山古墳
- 10. 城山古墳 11. 丸山古墳 12. 駒塚古墳 13. 瓦塚古墳
- 14. 笹尾古墳 15. 小泉大塚古墳 16. 六道山古墳

要性を考慮すれば、一つの完結した地形的範囲に形成された古墳群としての歴史的価値は高い。

額安寺は、「大安寺資材帳」などによれば聖德太子の熊凝精舎に由来すると伝えられる古代寺院であり、寺域を示した「額安寺伽藍並条理図」により著名である。班田図によると南大門・中門・金堂・講堂が南北一直線になる伽藍配置をもち、また主要伽藍東側には、雜舍・南院の存在が知られる。^{註④} 数次にわたる発掘調査を経ているが、奈良時代の遺構の検出は少なく、先年調査で出土した手彫り杏葉唐草文軒平瓦は、法隆寺若草伽藍出土例と類似する特徴をもち注目されている。^{註⑤} その後、額安寺は、西大寺の興性・忍性等によって鎌倉時代に再興するが、昭和58年度に調査された額安寺中興の祖・忍性の五輪塔は、地輪下に穿った土壙内に金銅製小型五輪塔形舍利器や銅製筒形骨蔵器等を伴うものであり、中世における高僧の埋葬形態や墓制を知る貴重な資料を提供した。^{註⑥}

また、額安寺の北側約200mに残る史跡・額安寺窯址群は、中世復興期の額安寺所用瓦を焼成した窯址群で、内一基が覆屋をかけ保存されている。南に焚口を向けるロストル式の平窯で、燃焼室の規模、長さ約1.3m、幅約1.0mをはかる小形の窯である。

以上のように額田部丘陵に存在する遺跡は古墳・寺院等ひじょうに少ないが、古墳群や寺院の発生・展開にみる一連の変容の過程は、当該地域一帯の政治勢力の動向を示すものと理解され、その意味で、額田部丘陵の占める歴史的・地理的重要性は、今後十分究明されるべき点であろう。

III. 調査の概要

1. 額田部孤塚古墳の概要

^{註⑦}

額田部孤塚古墳は、昭和41年、昭和工業団地内を南北に縦走する都市計画道路(大和中央道)の建設に先立ち発掘調査が実施され、後円部で二棺の主体部が検出されている。古墳は主軸方向を南々西に置く全長約50m、後円部径約26.5m、同高約5.0m、前方部最大幅約36m、同高約5.5mの規模を有する前方後円墳である。後円部中央部から主軸に直交する位置で同一墓壇に2棺が納棺されていた。両棺とも組合式木棺で、同時埋葬と考えられている。北棺は、長さ約4.0m、幅約0.8mの規模で東頭位であり、多くの副葬品を伴っている。頭部推定位置に冠帽の可能性のある金銅板片とガラス玉、また琥珀玉と中空銀玉等による頭飾が検出された。足位部には無孔のガラス玉が散乱し、足位部の両脇に直刀、剣各一口を置く。さらに脚部の西側に、挂甲小札・馬具・鉄鍔を一括して副葬する。木棺内を仕切板で区分した副葬品庫的な機能を示すものであろう。対する南棺は、長さ約3.9m、幅約0.6mの法量で、埋葬頭位は北棺と同じ東位である。頭部に管玉とガラス小玉の連珠になる頭飾と銀製耳環が検出され、また、木棺西端部の仕切板で区切られた空間には、長頸瓶約50本が一括埋置されていた。また、棺北側で棺外遺物と考えられる皮製品と馬具類が検出されている。その後、周濠部への工場建設や水導管埋設に伴う小規模な調査が数次にわたり実施され、円筒埴輪・形象埴輪の断片が出土している。

以上のように額田郡孤塚古墳は、豊富な副葬品遺物を有する後期前方後円墳としてその歴史的価値は高い。額田郡丘陵に築造された古墳群の構造を考究する上で、一つの要となる古墳であることはもちろん、後期における単独立地の中形前方後円墳として、盆地内の同時期の諸例と比較検討するべき点も多い。また、棺外遺物の配置状況も比較的明確であり、前期以来の副葬品配列の変遷や、その属性分析としての埋葬儀礼の変遷を考える上で資するところが多い。

2. 調査方法

今回の調査の目的は、既応の調査成果を踏えた上で次の4点に絞られた。すなわち、①外堤構築技術の把握と規模の確定、②周濠規模の確定と埋没状況の把握、③出土埴輪によるより詳細な古墳の時期比定、④その他、である。こうした目的を達成するためトレンチを、前方部前面位の外堤部・前方部南西隅部・墳丘南西・北西側の周濠部が検出されるよう設定し、トレンチ規模も予定されている路線幅員10mに合わせる形とした。ところが、トレンチを掘り下げたところ、県送水管埋設坑が大きくトレンチ内にかかってきたため当初予定していたトレンチ規模を相当縮小せざるを得ない結果となった。まず、周濠の埋没時期と後世の利用状況を知るため、周濠内堆積土上面を造構面として捉え中世遺構の検出作業を実施した。トレンチは、約200 m²の面積である。さらに、幅約2m、長さ約40mの範囲で掘り下げを行い、先述の古墳本体部分の調査とした。なお、B.M.は大和郡市都市計画基本図No.15、B.M. -7 = 46.30 + T.P.より水準した。

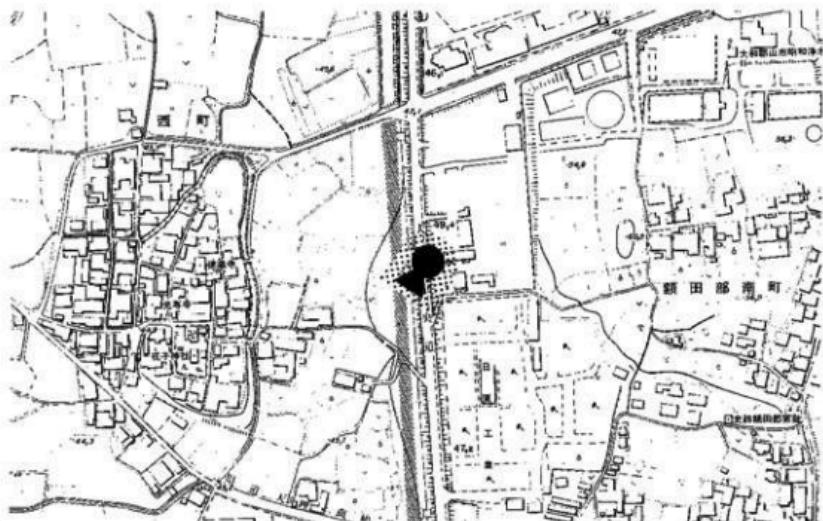


図2. 調査地点

3. 検出遺構

古墳周濠堆積土上面で検出した遺構は、いわゆる素掘溝である。幅約20cm～30cm、深さ約10cm前後の規模で南北方向に走行する例が多く、一部重複も認められる。トレンチ南端から約9.0mの地点の東西走する小溝で終結するが、この部分は、後述するが古墳外堤部に相当しており、周濠埋没後徐々に水田化される過程で、外堤部分が畦畔として利用されたことを示していよう。溝内には淡茶色の砂質土が堆積する。出土遺物は少なく、施釉陶器・土師小皿・羽釜・瓦質土器の細片であり、また、サスカイトの剥片が1点出土している。瓦器底を含まない点、あるいは羽釜片の形態から見て、素掘溝の時期は中世でもその後半期に比定できよう。

次に古墳の本体部分について述べる。前方部前面位置で幅約5.0mにわたり外堤部分を検出した。内側は周濠への緩かな斜面となるが、南側は約60cm落ち込んだ後、ほぼ水平に南方へ続く。外堤上面が後世に削平されてはいるが外堤の高さは相対的にみてそれほど高いとは考えられない。上垣面幅約4.0m、高さ約1.0mの推定値が得られようか。

外堤上面で溝状遺構を、また南側の一段下った部分で径約50cmのピット状の遺構を検出した。黒灰色の砂質土が堆積し、埴輪片が数点出土したが、性格は判然とし難い。また、断面図を見ると、外堤外側の一段下った部分が幅約1.0mの規模で外堤に添い浅く凹んでおり、外堤外部を廻る溝状の遺構と考えられた。その機能・用途の判断は、より面的な調査を待たねばならないが、外堤外部を一周する可能性を考慮すれば、今後「外周溝」とも称すべきこの種の施設の存在には十分留意す



写真1. 作業風景



写真2. 周濠部全景（北から）

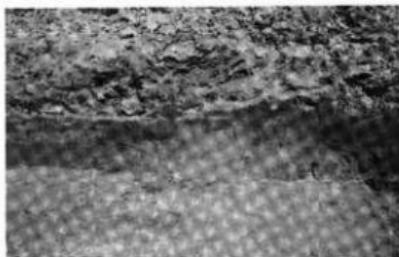


写真3. 外堤部の断面

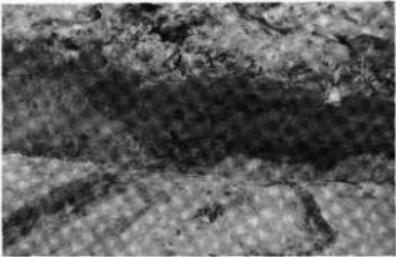


写真4. 「外周溝」の断面

图3. 调查区平面图 (A, 梁耀溝挖出平面图 B, 古坟周围勘探平面图)

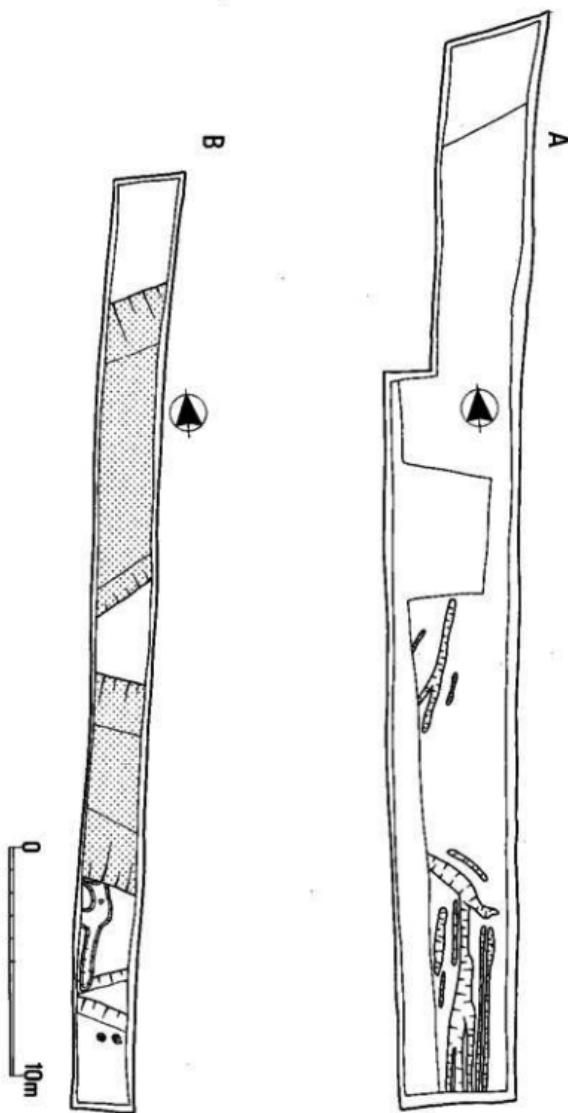
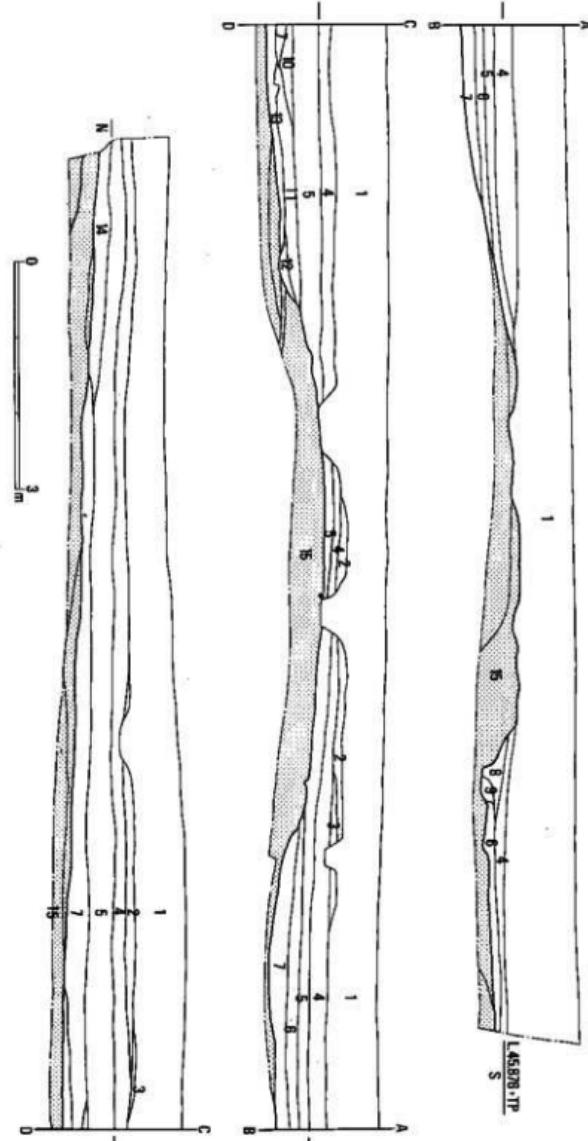


図4. ドレンチ横断面図



- 1.擾乱土 2.淡灰褐色土層 3.淡茶褐色土層 4.灰褐色土層 5.灰褐色土層 6.淡灰褐色土層
7.青灰色粘質土層 8.灰色微砂層 9.暗灰色微砂層 10.暗灰色粘質土層 11.黑色土層
12.灰色土層 13.淡灰色粘質土層 14.青灰色土層 15.地山 (b-ーン部分)

る必要があろう。外堤部分の構築は、盛土ではなく地山整形による。東方から伸びてくる額田部丘陵の末端部を利用したもので、径1~2mの大の堅く締った砂礫層より成る。

また、トレンチ北端部でも外堤の検出を企図したが、外堤推定部分が現在も調査区西側の水田への用水入水路として利用されているため十分調査を行えなかった。ただ、トレンチ北端に行くにつれ周濠底のレベルが徐々に上昇し、幅約3.0mの浅い段状の部分が認められ、外堤部分に近接した場所と考えられた。

前方部前面位置で幅約8.5mにわたり周濠を検出した。検出面での幅は約8.0m、底面では幅約3.5mを測り、深さ約0.8mである。濠内堆積は4層に分層でき、上部2層（断面図、第4・5層）に若干の中世土器片が含まれている。鎌倉時代頃の瓦器碗片で、周濠の埋没時期を12・13世紀頃に求めることができる。下部の2層（第6・7層）には円筒埴輪の破片を多量に含む。最下層には青灰色粘質土が厚さ約20cmにわたり堆積する。この第7層は、木葉・木枝を多く含むような腐食土層ではなく、周濠部への滲水による水成堆積層とは考えられない。上部3層も砂質土であり流入土の様相を呈することから考えて、最下層の形成も人為的・恒常的な滲水に起因するとは考えにくい。したがって、額田部狐塚古墳の周濠は本来、空濠であった可能性が強い。

墳丘北西側の周濠部分も南北約13mにわたり検出した。墳丘主軸に直交する位置ではないため、また、先述のように北側外堤部分の調査が不十分であったため正確な規模は不明であるが、推定幅約12mとなり、前方部前面位の周濠幅に較べ約4.0m幅広となる。深さは約5.5mを測り、外堤部からの傾斜は緩慢である。濠内堆積土は先述の堆積相とはほぼ同じであるが、周濠断面図の第12・13層の堆積が注意される。炭化粒・炭・植物層をブロック状に含む土層で、前方部隅部から下方に流れ込むような状況で堆積し、しかも濠内最下層を形成している点から考えて、築造後間もない時期に前方部で執行されたある種の祭祀に関連する可能性が指摘できる。具体的な検討は類例の増加を待ちたいが、墓上祭祀・追祭祀などの問題を考える上で今後留意すべき点であろう。^{註⑤}

トレンチ中央部で、前方部の南西隅部を検出した。最先端部は未検出である。墳丘の基底部と考えられ、地山・黄色粘質土層を整形して造り出す。盛土ではない。上部は後世の水田化が要因となり平坦化されている。

4. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、近世期の染付茶碗、中世の瓦器碗・羽釜・土師器小皿・瓦質土器・施釉陶器・青磁・古墳に伴う埴輪類などである。素掘小溝出土の羽釜・土師皿、周濠最上層出土の瓦器碗等は、濠の埋没時期の確定作業上きわめて重要な遺物であるが、細片のため図示できない。ここでは量的に最も多い埴輪片を示す。総数50点余りの断片が出土したが、普通円筒埴輪の他に朝顔型円筒埴輪・形象埴輪も数点出土している。また、焼成状態から大きく須恵質のものと通有の茶橙色系統質土器質のものに二大別し得る。内、ハケメ等の調整過程が比較的良好に遺存し、同時に

時期決定の示標となり得る形態的特徴を有する断片個体を抽出し、説明する。^{註19}

1～8は、普通円筒埴輪の断片である。

1（図5-1・図版8-1）は、外面一次調整にタテハケを施し、後二次調整としてはヨコハケを使う。ハケの密度は5条/cmと粗い。内面も同じヨコハケを施す。突帯は安定した形態を保つ。下端部を工具で強く面取り状に調整するのが特徴的である。精良な胎土、焼成は硬質、淡茶橙色を呈する。

2（図5-2・図版8-2）は、外面にタテハケ後ヨコハケ、内面にヨコハケを施し、調整手順は1と同じである。ハケの条痕密度が1に較べ緻密である。突帯は側面が大きく凹むM字形を呈し、上下両端部が鋭くおさまる。細砂を少量含む胎土で、焼成は硬質、淡橙色を呈する。

3（図5-3・図版8-3）は、器壁が他例に較べ薄く約0.8cmをはかる。外面は、一次タテハケ後、動作単位の長い断続的ヨコハケを施す。内面上半部は、布帛・皮革を利用した丁寧なナデ調整で、下半部は荒いナナメハケを施す。突帯は、高さ約0.5cmと小形であるが、端正に成形する。精良な胎土、焼成はいわゆる須恵質で、青灰色を呈する。

4（図5-4・図版8-4）は、3と同じく青灰色を呈する須恵質埴輪であるが、断面深部での焼成は甘く灰白色を呈する。外面調整は3と類似するが表面が摩滅しており判然としない。内面には、指頭・ナデによる調整痕が残る。突帯は安定した形態を保ち、上端部を特に鋭くおさめる。

5（図5-5・図版8-5）は、外面の一次調整はタテハケ、二次調整に動作単位の長いヨコハケを施す。C種ヨコハケの可能性がある。内面では、突帯裏面の位置に指頭痕が線位に顯著に残る。下半部は動作単位の長いヨコハケである。突帯は大形で、側面が大きく凹み、上下両端部を鋭くおさめる形態である。胎土は精良、焼成は堅緻、外面は灰茶色、内面は淡橙色を呈する。

6（図5-6・図版8-6）は、円筒埴輪の直上型口縁の破片である。上端面は平坦におさめるが外端部が外方に肥厚するのが特徴的である。外面に荒いヨコハケ調整、内面には、ヨコハケ・ヨコナデが認められる。精良な胎土で、焼成は須恵質、暗青灰色を呈する。

7（図5-7・図版8-7）も直上型口縁の断片。外面は、荒いタテハケ7条/cmの後、同密度のヨコハケを施す。動作単位が長く、また約1.5cmの間隔で重複を避けて施す。原体幅は1.0cmである。内面は丁寧なヨコナデ調整の後、外面と同じようなヨコハケを施す。このヨコハケの施し方は、口縁のみに限られた手法であろう。胎土は精良、焼成は良好、淡灰橙色を呈する。

8（図5-8・図版8-8）は、外面にタテハケ後ヨコハケ調整を施す。内面は表相剥落のため判然としないが、部分的に指頭圧痕が遺存する。細砂を少量含む胎土で、焼成は良好、淡灰橙色を呈する。

9（図5-9・写真5）は、朝顔型円筒埴輪の花状部断片。復元口縁径は、約60cmほどにならうか。外面調整は、一次ナナメハケの後、二次調整として幅狭のヨコハケ5条/cmを施す。ヨコハケは互いに重複せず約1.5cmの間隔を保つ。この施し方は、普通円筒埴輪の口縁部に認められる。内

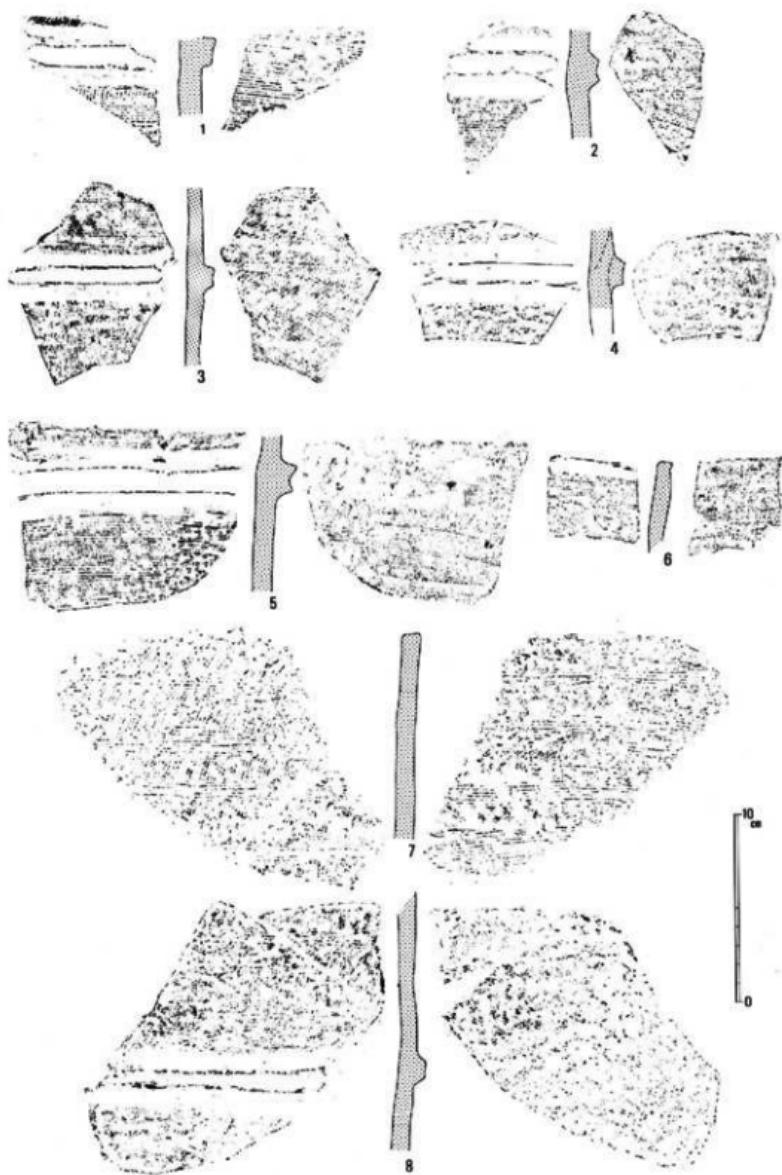


図5. 出土埴輪実測図1 (1:3) 図

面は動作単位の短いナナメハケで調整する。屈接部に突帯が遺存する。断面梯形を呈する安定した形態をもつ。胎土は精良、焼成は良好、淡灰橙色を呈する。

10(図7-10・図版8-10)は、形象埴輪である。全形は不明。断面三角形の突帯が併行して2条貼付される。外面に径約0.5cmの円形竹管文を配する。調整はナデが主体である。細砂を少量含む胎土で、焼成は須恵質、暗青灰色を呈する。

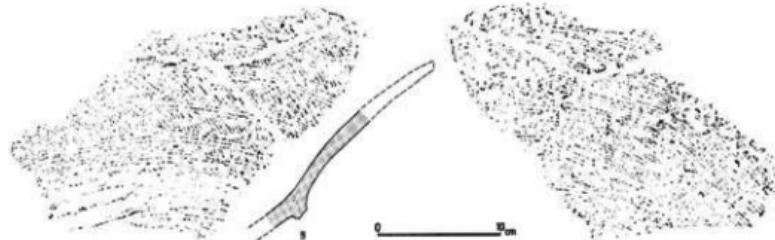


図6. 出土埴輪実測図2

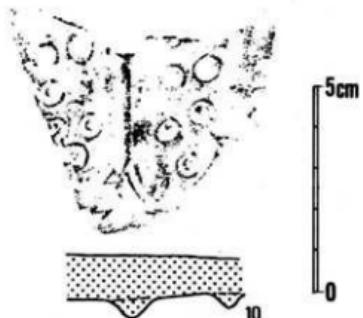


図7. 出土埴輪実測図3

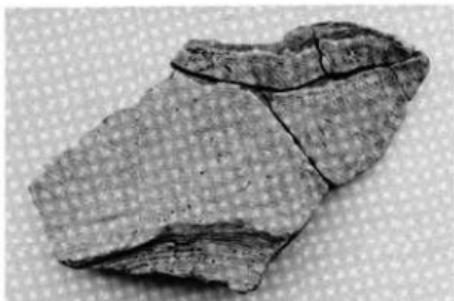


写真5. 朝顔型埴輪(約1/4)

IV. ま と め

額田部丘陵に築造された古墳は、その立地・相互の位置関係から、松山古墳・狐塚古墳のように単独墳として、あるいは、上庭田古墳群・来迎墓ノ間古墳群のように一つの古墳群として理解できるものがある。しかし、額田部丘陵という一つの狭小で完結した地形的単位内に分布するという点を重視すれば、総体として広義の一古墳群とする認識も成立し得るであろう。そうした意味で、額田部古墳群の形成過程や構造を概観することは無意味ではあるまい。ただ、現時点では資料的制約が大きいので、向後の具体的資料の出現に備える簡単な見通しとしたい。

まず問題となるのは、松山古墳の時期比定である。現時点ではその墳形・埴丘規模等しか知れず、時期決定の確たる根拠となり得る資料は皆見にのぼっていない。単独立地・二段築成・周濠等の要素は中期的とも言えるが、葺石・埴輪等の外部施設を伴わない点、盛期の大形古墳にはない古い要素として指摘できるかもしれない。狐塚古墳より先行することは確実と思われるが、前期段階まで遡上させ得るか否かは、資料の増加を待って判断したい。いずれにせよ額田部丘陵で最も早く築造された古墳であり、佐保川・初瀬川に面する丘陵南側斜面への立地、円墳という墳形を探る点など、古墳群形成初期の具体相を知るうえで重要である。中期末葉に至って狐塚古墳が築造される。単独墳としての立地、前方後円墳の採用、豊富な副葬遺物などをみれば、一つの画期として認識できよう。埴丘規模も約 50 m を測り、単独立地の後期前方後円墳としては盆地内でも類例が少なく、郡山新木山古墳・烏土塚古墳などと共に平群郡内の後期社会の構造を考えるうえで注目すべき古墳である。^{註①}その後、上庭田古墳群・来迎墓ノ間古墳群が盆地内の後期古墳群の動向と軌を一にして形成される。後者のように前方後円墳を盟主墳として構成される群集墳は、御所市笛吹古墳群・当麻町竹内古墳群・広陵町安部山古墳群・天理市二ノ瀬池古墳群^{註②}など類例が多い。こうした後期段階に至っての古墳の築造は、丘陵西端部に集中する。この西町・額田部南町・岡崎の集落一帯は、現在水田としての土地利用が多く、沖積層・三角洲性低地としての地理的印象を与えるが、この一帯はもともと額田部丘陵の西側最末端部に相当する所であり、周辺の遺存地割の乱れも、従前の指摘にある河川氾濫によるものではなく、丘陵末端部の水田化という後世の人為的造作に由因するものであろう。比較的起伏の小さい丘陵末端部の低平な地に古墳築造の場が移行したことは、後期古墳群の造営に関して指摘されている「墓域」の計画的設定の問題と相俟って興味深い。その後の様相は判然としないが、額安寺創建に認められる初期仏教寺院の成立が、古墳時代後期社会の解体を思想的政治的に促し、被葬者がより特定化・限定化され古墳群の終束を迎えるのであろう。額田部南町に所在する融通寺の北側に一基の円墳が確認されている。北側周辺に広いテラス状部分を伴う古墳であり、また、額安寺班田図に「船墓額田宿称先祖」と記載されている平群郡九条三里二六坪の^{註③}北西隅の地点が、この古墳の位置に該当することからも、額田部丘陵に形成された古墳の終末を考えるうえで、今少し検討すべき存在であろう。

額田部古墳群の動向は、以上のように概観できよう。ところで、盆地北西部の低位地帯に同じように古墳群が形成された例があるので、あわせて比較検討を行っておきたい。盆地縁辺に源を発する大和の大形河川、初瀬川・佐保川・寺川・曾我川・飛鳥川・葛城川・高田川等は、盆地北西部の河合町・安堵村・川西町付近で合流し大和川となり大阪平野に流出する。こうした乱流・網流を繰り返す河川氾濫の著しい低位地域の縁辺に、低地内微高地とも表現しえる地帯が遺存している。額田部丘陵もその一つであるが、その他、島ノ山古墳が位置する川西町唐院の一帯、河合大塚山古墳が位置する河合町河合一帯も、各河川が大和川に合流する河川最下流部に形成された微高地であり、周辺を扇状地性低地や三角洲性低地に囲まれた、いわば陸の孤島とも言うべき様態を保つ地形である。こうした微高地を古河川嘗力による下位段丘面の削残地帯とする地形学的見解があるが、低位部に遺存する特徴的地形に安定した大形古墳が築造される共通性は注目すべきであろう。唐院島ノ山古墳は、全長約195m、後円部径約105m、前方部長約90m、幅約20mの周濠を有する大形前方後円墳であり、車輪石・鐵形石の出土はあるが墳丘形態には中期的要素が認められ、中期初頭の年代が付与されている。^{註④} 島ノ山古墳に継続する古墳は認められていが、南方約1.0kmの三宅町赤丸・屏風付近から田原本黒田にかけて、後期前方後円墳が10数基知られており、倭屯倉地帯の古墳群として注目されている。川合大塚山古墳群は、全長約215mの大塚山古墳を盟主とし、中良塚古墳・城山古墳の前方後円墳と円墳の丸山古墳を主要な構成墳とする中期古墳群である。大塚山古墳外堤部、丸山古墳周濠部の調査以外に大規模な調査は受けていない。^{註⑤}

これら三つの古墳群は、明確な前期古墳を含まず中期段階に入り造墓活動が活性化すること、河川最下流部の微高地に立地することなど多くの共通性を伴っている。もちろん、構成墳や形成過程の具体相は等質的ではない。たとえば、河合大塚山古墳群などは馬見丘陵東裾部に築造された多くの前・中期古墳との一體的な把握がこれまで採られてきた一般的な方法でありそこから輪番制的な政治体制というものが導き出されてきた。しかし、立地する地理的・地形的特徴を古墳群認識上の一つの大きな示標として抽出すれば、こうした比較検討もある程度の意義を持つ。先の共通性は、中期における盆地低位部の開発進化とそれに伴う古墳築造場所の拡散化、大和川水運の再開発と水系合流地帯の水利交通上の重要性の隆興を示していると考えられる。

ところで、続く7世紀代に入ても興味ある事象がみられる。「日本書紀」推古十六年八月条の隨使裴世清入京時の海石榴市における、また同じく推古十八年十月条の新羅・任那遣使入京時の阿斗河辺館における額田部連比羅夫の記載である。^{註⑥} 早くから額田部一帯に蠶居した額田部連が、初瀬川水系・寺川水系を通じて大阪平野から畿内中枢部へ入る水運・外交ルートに関与していたことが知れるのであり、こうした氏族台頭の経済的・政治的拡充の遡源を額田部狐塚古墳の出現に表象される額田部古墳群隆興の古墳時代に求めて大過ないであろう。^{註⑦}

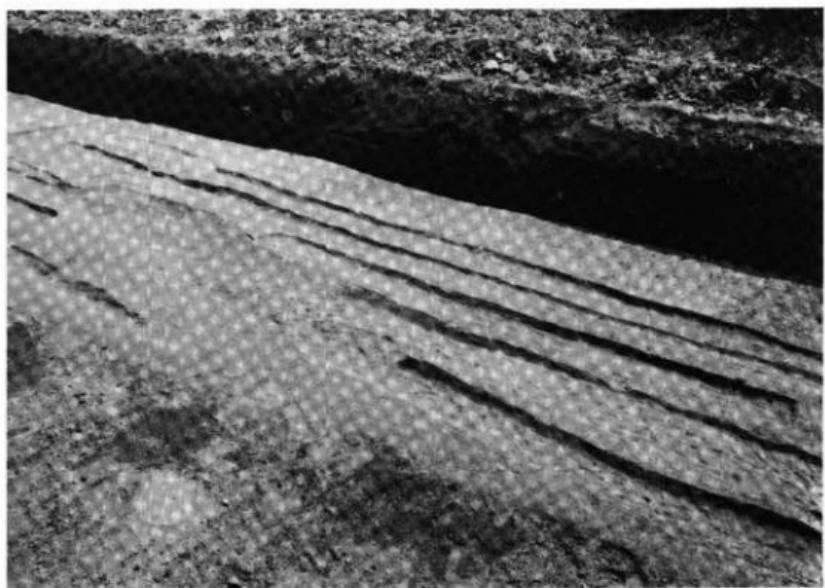
- 註① 奈良県教育委員会『奈良県遺跡地図』第1・3分冊（昭和46年）
- ② 「額田部狐塚古墳発掘調査概報」「奈良県史跡名称天然記念物調査抄報』第17輯（昭和42年）
- ③ 昭和58年8月、残存する墳丘上から円筒埴輪片を採集した。後日、改めて報告したい。
- ④ 西岡虎之助編『日本莊園繪図集成』（昭和51年）
- ⑤ 「額安寺旧境内発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報1978年度」（昭和54年）
- ⑥ 「額安寺」「1982年度発掘調査速報展3」展示解説書（昭和58年）
- ⑦ 岸熊吉「三井窯址及び額田部窯址調査報告」「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告」第13冊（昭和10年）
- ⑧ 以下の記述は註②文献による
- ⑨ 註②文献で、灰層が墳丘盛土に利用されていることが報告されており、墳丘築成土の崩壊土である可能性もある。
- ⑩ 出土埴輪の説明に関しては下記の文献によるとところが多い。
- 川西宏幸「円筒埴輪論」「考古学雑誌」第54巻第2号（昭和53年）
- 赤堀次郎「円筒埴輪製作覚書」「古代学研究」第90号（昭和54年）
- 前園実知雄「大和における後期前方後円墳の規模と分布について」「橿原考古学研究所論集」4（昭和54年）
- 註①と同じ
- 柳沢文庫専門委員会『大和郡山市史』（昭和41年）
- 佐藤小吉「鳥根山古墳」「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告」第7冊（大正9年）
- 伊達宗泰「屯倉地帯の古墳群」「古代学研究」第59号（昭和46年）
- 「奈良県の主要古墳」II（昭和46年）
- 岸後男「古道の歴史」「古代の日本」5（昭和45年）
- 額田部狐塚古墳の年代観に関しては註②文献に従っているが、出土した埴輪の形態的特徴からみて、もう少し遡らせて考えた方が妥当であろうと思われる。この点は、盆地内の各古墳との具体的検討を経た上で、後日、本報告書において果したい。
- また、註②文献で集成された100数基に及ぶ後期前方後円墳の中には、中期的要素を保有するもの多数あり、中期と後期の明確な区分が今後の具体的な課題として残されよう。

圖版1
額田部狐塚古墳遠景

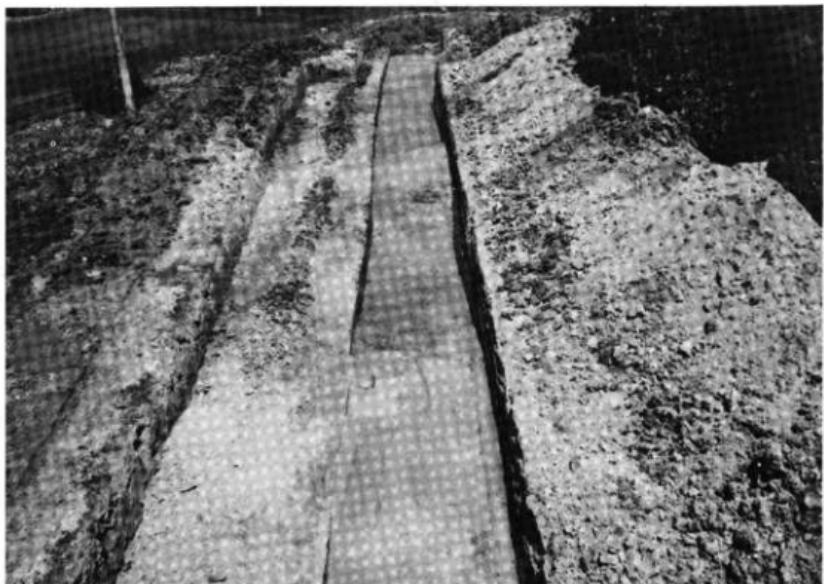




a. 素掘溝検出状況（北西から）



b. 素掘溝検出状況（南西から）



a. 周濠部全景（南から）



b. 周濠部全景（北から）



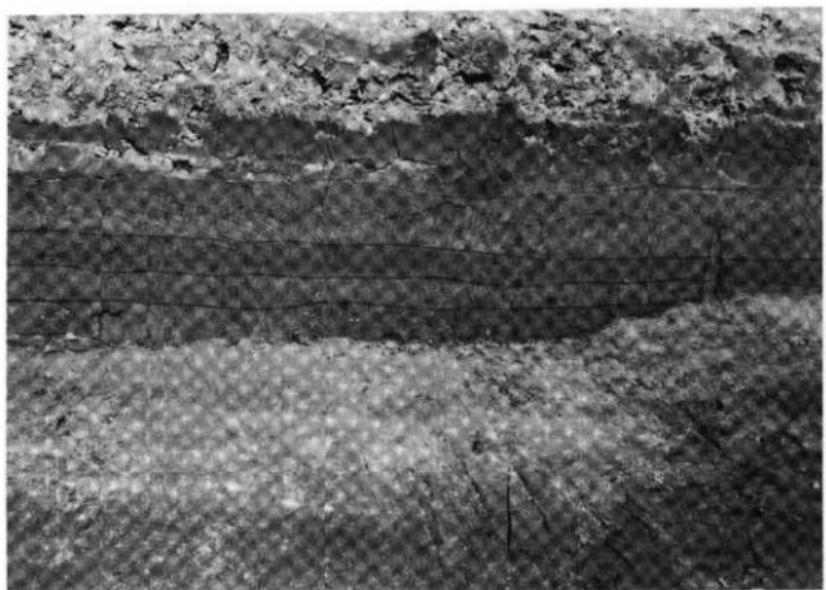
a. 外堤部全景（南西から）



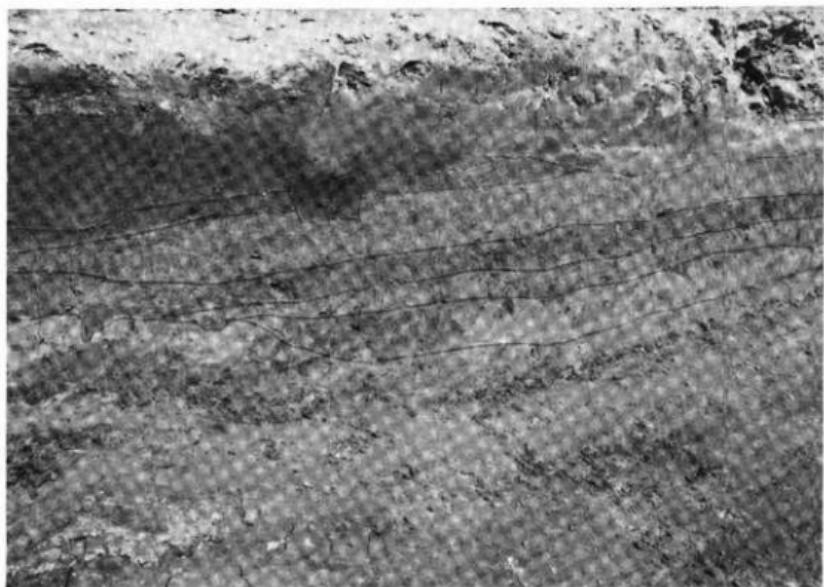
b. 外堤部全景（西から）



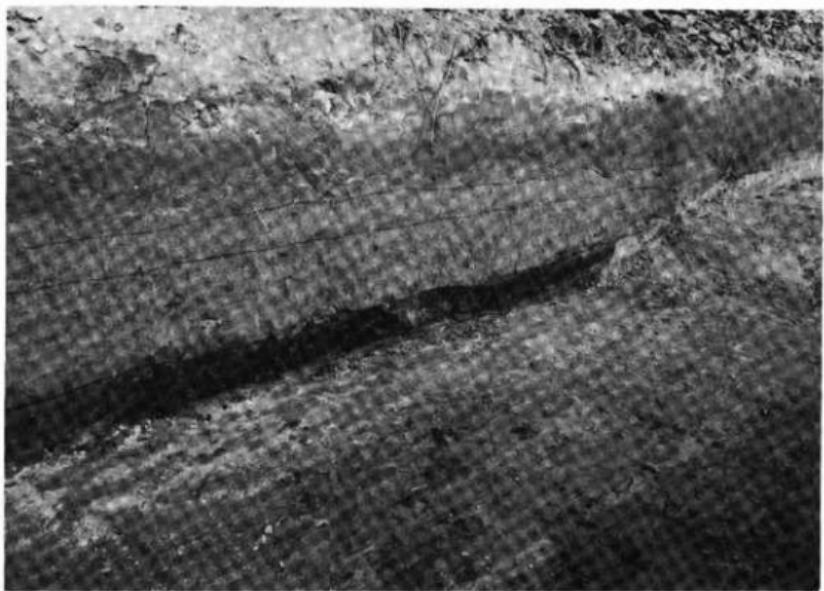
a. 前方部前面部分の周濠（北西から）



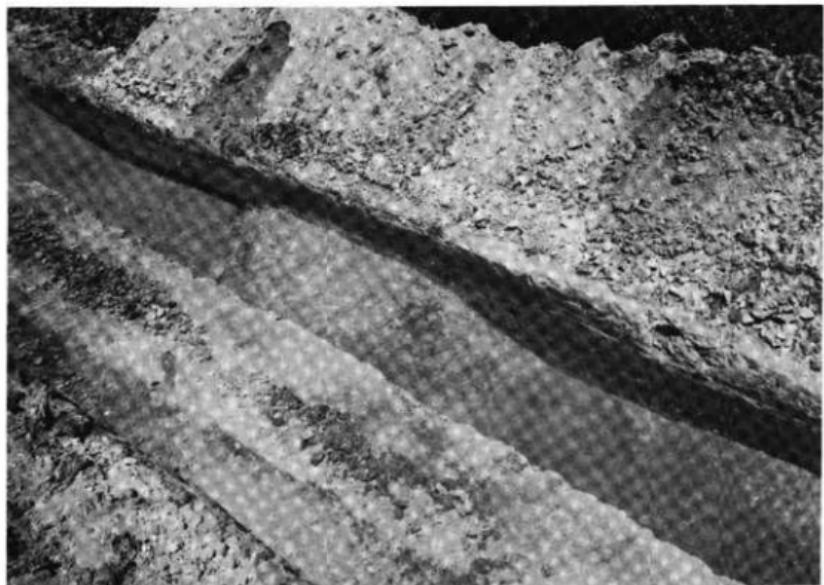
b. 前方部前面部分の周濠土層堆積状況（西から）



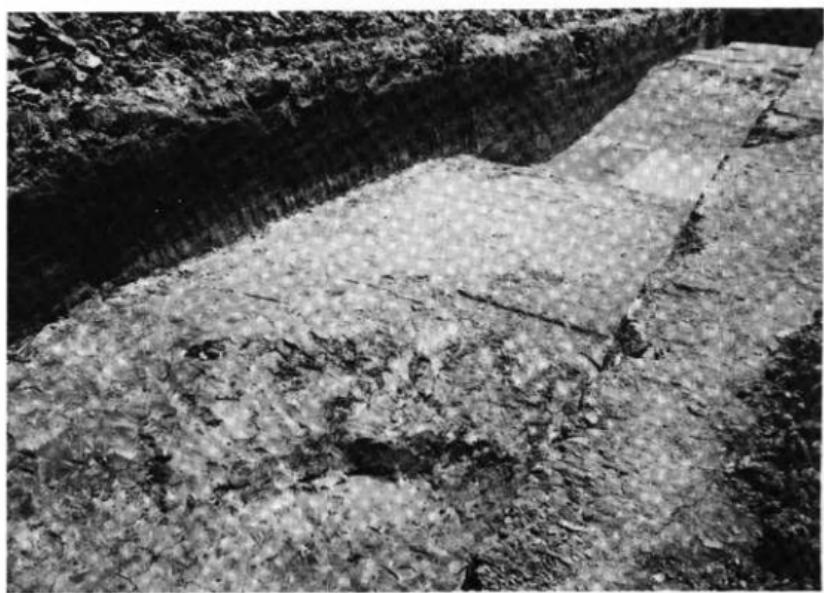
a. 周濠部土層堆積状況（西から）



b. 周濠部分の黒色灰層の堆積状況（西から）



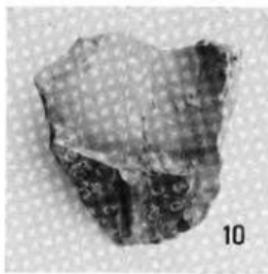
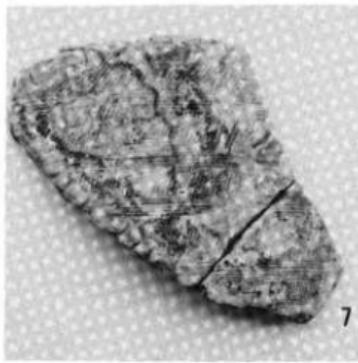
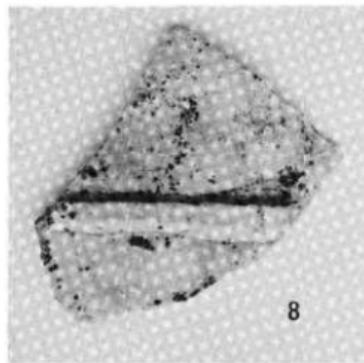
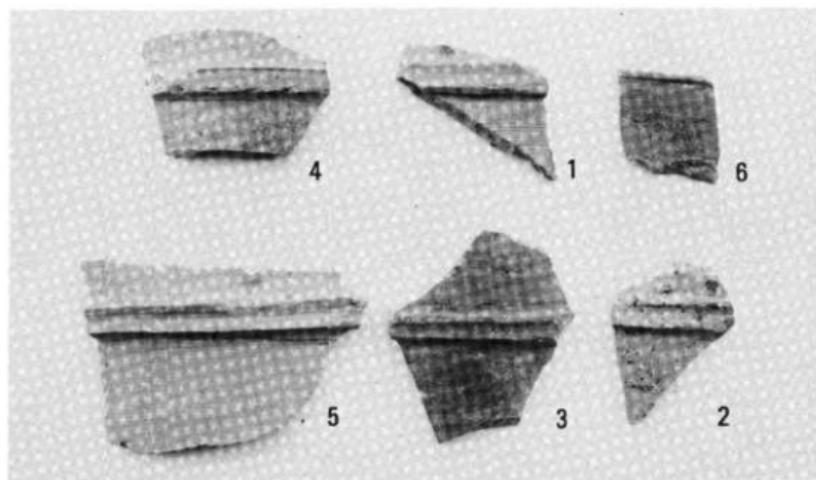
a. 前方部南西隅部全景（南西から）



b. 前方部南西隅部全景（北西から）

図版8.

額田部古墳周縁部
出土埴輪



番号は実測図番号に
一致する（縮尺不同）

大和郡山市文化財調査概要 1.

—額田部狐塚古墳周濠部
発掘調査概要報告—

昭和 59 年 3 月 31 日

発 行 大和郡山市教育委員会
大和郡山市北部山町 248-4

印 刷 金井平版印刷
大和郡山市北西町 227